

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要

論文題目

ティームティーチングにおける教師同士の相互理解  
— コミュニティが「機能」した教育への一考察 —

林 亜友美

2010年9月

日本語教育において、「教師」はどのような立場として認識されているのであろうか。学習者主体ということばが珍しいものではなくてから久しいが、「教師」がどのようにあるべきかという問いについては、いまだ抽象的な教師像への言及に留まっていると筆者は考える。学習者を取り囲む周囲の環境も学習に影響を及ぼすと考えれば、学習者と同時に教室に存在する教師は、学習者以上の動的な存在であることも含めて無視するわけにはいかない。

では、その「教師」はどのように学習者へのアプローチを行なっているだろうか。授業の方法論については教授法を初めとする様々な試みが研究されているが、教師が学習者に対してどのような体制でアプローチを行なうかといった、根本的な組織としての在り方にももっと注目すべきではないだろうか。「教師」がその在り方について明確に言及されずにここまできたのには、「教師」という職種が持つ特殊性が関係していると筆者は考える。

一般的に「職場」では、他者とのコミュニケーションを欠かすことが出来ない。多くの場合、同僚と分断された状態で仕事を行なう場合は少なく、常に連携が必要とされるだろう。その点において、「教師」は孤立した状態で存在することが可能な特殊な職業であるといってい。孤立した状態とは、教育における多様性の可能性を失い、一個人の教師の主観がそのまま教室に反映されることが可能である状態を指す。実際、授業を行うのは一つの授業につき教師一名であるだろう。その授業でどのようなことが行なわれているのか、同じ学習者を共有している教師も知りえないことである。「教師」による教室という世界は、閉鎖性を保った世界なのである。

だがそれでは教育の質という問題が生じてくる。一つの教育機関に教師が一人であることはそうそうない。複数の教師で構成される「教師」というコミュニティが存在するにも関わらず、教室という空間によって隔てられた教師たちは孤立したままなのである。多くの教育機関がチームティーチング（以下TTと称する）を採用しているにも関わらず、教師の個人主義は貫かれ、一向に改善の余地が見られないのは、教師という種類の職業のあり方とそれを放置する教師の怠惰であるといえるだろう。

本研究は、教師間でコミュニティが機能することによってどのような結果が生じるのか、それが教師個人にとってどのような影響があるのかを調査し、今後の「教師」のあり方や授業組織の体制について提言を行なうものである。意識的に相互に連携を行い、「教師」というコミュニティに価値を覚えている教師やチームは多くないということが問題であるということと同時に、そのような意識的な相互理解の必要性が広く議論されるべきなので

ある。

このことから、本研究の目的は次のように定めた。①教師同士の授業に関する合意形成において、個人同士の相互理解は影響を及ぼすのか。また及ぼすとすれば、どのようなレベルでの関係であるのか。②教師同士の相互理解は、教師個人にどのような影響を及ぼすのか。③学習者の教室活動に対する評価に教師同士の相互理解は影響を及ぼすのか。及ぼすとすれば、どのような影響であるのか。の、三点である。

「教師」というコミュニティが機能することに意義があると予想した筆者は、コミュニティ全体ではなく、そこに存在する教師個人がどのようにコミュニティを認識するかという意識を段階的に追うことで、本研究の前提となる①を挙げた。教師同士の相互理解は、個人レベルではただの相互理解に留まるが、それがコミュニティという規模まで拡大することでコミュニティの機能へと変化すると予想し、教師個人の相互理解から生まれるコミュニティとしての機能とそれについての教師の認識をインタビューによって明らかにした。その詳細な関係構築のレベルについての調査が目的の②に該当する。さらに、本研究では「教師」を対象として挙げたが、最終的に、コミュニティの機能がもたらす教育の改善は、学習者に還元されて然るべきであるという筆者の考えから参加者の声を取り入れ、「教師」としてのコミュニティが機能することが参加者にどのように評価されるのかを探ることが③の目的となっている。

第2章では先行研究やことばの定義を行なった。取り上げた先行研究は、主に日本語教育におけるTTについてである。多くのものが実践報告やNS・NNSに分類した上での研究となっており、人としての個性以前に言語属性領域に留まってしまっているのが最大の問題点であろう。本研究の調査では、偶然にも全員がNSであったが、言語属性に関しては一切考慮していない。この点を問題として挙げ、本研究では個人として教師それぞれを観察・分析している。

第3章では本研究の調査と分析を行なった。調査は1と2に分かれており、中心となる調査1は設計者（ボランティア教室のため、教師ではなく設計者／学習者ではなく参加者と称する）、調査2は参加者による視点の調査である。本研究では、実践「にほんご わせだの森 09 秋」（以下「09 秋森」と称する）という日本語ボランティア教室を対象とした。このフィールドは日本語教育経験の有無や経験年数（0～12年）にばらつきがあり、実際の教育現場とさほど変わらない人材の環境であることや、ボランティア教室をほぼ白紙の状態から設計していくという方向性から、通常の教育機関以上にコミュニティとしての相互

理解の必要性があり、コミュニティが機能しやすい、TTの実態を調査するのに適した環境であると判断したために選出した。

また設計者は筆者も加わって七名のTTとなったが、最終的にはTTが機能したと筆者が判断できるだけの状況になった。このことから、このボランティア教室の環境が通常の教育環境と近くなれば、本研究の分析の結果明らかとなった、TTが機能した結果と同様のものが表れると予想している。結果としては、TTの機能は教師個人に影響を与えるということが明らかになり、研究目的の①が達成できたということになる。

収集したデータは「09秋森」の設計側のミーティング記録」「設計者へのインタビューデータ」「活動案」「自己観察記録」の四点である。実際に使用したデータの中心は「09秋森」の設計側のミーティング記録」と「設計者のインタビューデータ」とした。これは設計者のインタビューから教師個人のTTによる新たな気づきの認識や授業への成長が見られたため、設計者たちの声を中心に分析することでより鮮明なTTの内面を探ろうと考えたからである。設計者がTTをコミュニティとして機能させたことで、どのようなことが生じたのかを、設計者SとYを中心に分析を行なった。調査内容は、研究目的と同様に、発言当該箇所が教師同士の相互理解が教師個人に影響を及ぼした例であることが判明してからその内実を探っている。具体的にどのような影響を及ぼしたのかをインタビューから引き出し、そこから目的に該当する発言を抽出し、カテゴリー化してからそれぞれに分析を行なった。

調査の結果、抽出できたカテゴリーは8種類であった。1) 全体TT, 2) SYTT (設計者SとYによるTT), 3) 日本語学校TT, 4) 相手評価, 5) ビリーフ, 6) TTにおける自己表現, 7) 教師としての自己意識, 8) その他, である。また、8カテゴリーのうち、本研究では研究目的に沿うカテゴリーである1), 3), 6), 7)に絞って分析を行なった。残りの4カテゴリーについては、今後の研究で分析していきたい。

1) 「全体TT」とは、設計者7名全員で行った、「09秋森」のミーティング→活動→振り返り(反省の意図をもった活動直後のミーティング)」という一連の作業の流れのことを指す。個別の認識は、最もTTの全容が明らかになるこのカテゴリーで共通していたことが特徴とである。この「全体TT」においては、設計者は以上の4点について強い認識があったと考えられる。その4点とは「全体の理念の変容」、「チームのルール」、「全体TT」と「個別TT」の違い、「役割と意義の認識」であった。TTにおいて、経験や立場から力関係が生じてしまうことによって平等性が損なわれ、関係構築においてTTの理想的である対等な立

場を確保できないことは大きな課題である。理念の共有だけでなく、チームとしてのルールが必要となってくるのが明らかとなった。他にも、TT において、携わる者が共有すべき事項や留意すべき点などがこの項から抽出できた。

3) 日本語学校 TT については、本研究の調査対象者 7 名のうち、5 名は日本語学校での勤務経験があったことから、彼らの発言を検討し、調査対象となった実践活動である「09 秋森」と現在の日本語学校で TT にどのような差異があるのかについて、「目的に沿った TT」「TT の方法と内容」「教師の展望」の 3 点から論じた。

国内の日本語学校では、TT を取り入れている機関が多いが、実際には非常勤講師の多さから作られる集団を学習者ごとに複数のグループに分けただけの、単なるチームとしての認識で用いている TT も多く、筆者の定義する TT とは異なっているような現状も見られた。中には機関内には TT としての機能が存在しているのに、教師がそれを肯定的に捉えることの出来ない状態や、教師間の関わりがきわめて機械的だったり、関係構築のための歩み寄りがなかったりという状態があることが浮き彫りになってきた。なお、本研究では、日本語学校の体制を単に批判するものではなく、あくまでも「09 秋森」の TT を中心に論じた中で他の TT 経験という扱いで論じている。

6) についても触れると、TT における自己表現では、互いがどのような理解をし合うことが必要なのか、という問いから、「理解」とは何かを「理解の定義」として論じることから出発した。そして筆者が論ずる「教師同士の理解」すなわち、「相互理解」とはどのような理解であり、どのような方向性を持つものであるのかを論じた。「相互理解」とは相手を理解すると同時に、自らを相手に理解してもらうための自発的な自己表現という相互の行為によって成り立つものであるとした。そこでは、いかに自己を伝えたいかを明確に認識し、それを正確に相手に伝えるだけの自己表現が求められるという結論から、「09 秋森」での自己表現について、どの程度の自己表現が行なわれればコミュニティ機能にとって意味ある「相互理解」ができるのかという点を「自己表現レベル」という視点で、また自己表現という行為自体が教師に与える影響を「自己表現の影響」という視点でそれぞれ分析を行なった。

7) 教師としての自己意識では、TT においては、各設計者が様々なことを感じながら活動を進め、常にそれぞれの自我として存在したはずの「自己意識」によってどのようなことを認識していたのかを論じている。まず、データを基に本研究における「自己意識」を明らかにし、本調査での「自己意識」はどのような点において認識されているのかを、「自

己意識」の焦点」として述べ、それが「TT の中でどのような変化を見せたのか」と、「自己意識」の焦点」で得た「自己意識」が認識した居場所がいかにかに教師に影響を与えるのかを、「居場所の喪失」として論じた。「自己意識」と筆者が判断したのは、主に各設計者が持つ「教師像」や TT・教室に対して持つ「居場所への認識」である。これは、「自己意識」の中でも自らの存在意義を問われる事柄であり、各設計者がそれ模索しながら活動やミーティングに参加していた様子が見えた。このことから、ここではコミュニティが教師個人に対して影響を与えるものであるということ、および教師としての「居場所」が教師個人にとってどのような意味を持つのかということについて論じている。以上が調査 1 の大まかな分析による分類である。

調査 2 は、調査 1 のような TT が活動を通して参加者にどのように評価されているかを調査したもので、研究目的の③にあたる。この項は課題が色濃く残り、今後の課題としては、調査方法からの再検討が必要であると考えているが、本研究でもおぼろげながらその方向は見てきたと筆者は考える。まず、教室としての目的達成や、教室としての活動の流れを作ることに成功したということが、設計者（教師）同士の相互理解による関係構築やコミュニティとしての機能作用によってなされたということを証明するのは困難であった。結果として、参加者の TT でのコミュニティの構築による影響は、設計者（教師）の明確な行動での評価には結びつかなかったようであるが、「09 秋森」の目的を達成したといえる発言も参加者から得られたことから、TT による活動そのものは成功したと言えるだろう。参加者に TT の評価を求めるには、設計者（教師）による具体的な行動ではなく、検討してきた活動の評価について問うことが望ましいということもわかってきた。活動の全体を俯瞰し、目的に沿った流れでわかりやすく考えられた活動が行えていたかどうかを評価してもらうことが TT を評価することに繋がると考え、今後の研究に生かそうと考えている。

第 4 章では、第 3 章のデータを基に、筆者の考察を詳しく行なった。データとしては第 3 章と重複するものも多いが、ここでは TT による教育の可能性、中でも「教師」の成長の可能性を今回のフィールド調査で得た経験とデータから論じている。ここでの「教師」はコミュニティに内在する一個人としての教師である。最終的にそれらの個々の教師は、「教師」というコミュニティに統合されるわけだが、本研究では個人レベルの教師に TT が与え得る影響の可能性について論じた。

第 5 章は最終的な本研究のまとめとして、次のように論じている。①教師はコミュニティが機能することにより、そこでの存在意義という自身の世界への意味づけを確立するこ

とができる。②個人に内在する教師としての自己意識は、他者との関わりの中で見出されるものである。③従来の TT は正常に機能していない場合も多く見られるが、本来は孤立しがちな教師をコミュニティとして受け止め、さらなる教育の可能性を秘めているシステムであると言える。以上、三点が、研究目的の三点に即している。

コミュニティの構築は、単なる理想論ではなく、必要性を帯びた具体的なシステムであることを明確に示唆したい。TT は、以前から当然のように用いられてきた概念ではあるが、その実、これを教育に有効なものとして活用しようとする動きは、日本語教育においてはまだ鈍い。筆者は、教師同士の相互理解がコミュニティ構築へと繋がると考えるが、それはプライベートでの友好関係と混同されうるものではない。TT は、教師同士が教室という垣根を越え、それぞれが自身の授業を見つめなおす機会であると同時に、TT の多角的な視点によって考案された授業は、多くの学習者へ向けたものとなるに違いない。さらに分断された教育機関の体制を「教師」が主体的に変えていこうとすることで「教師」というコミュニティの一体感が生まれ、教室という隔たりが学習者のみならず教師の中からも消えていくことだろう。